

2012年4月15日発行（隔月刊）



うか

ISSN1880-8646
2012年4月
第91号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

創刊15周年記念号

漢点字の散歩 (29) (岡田健嗣)	1
点字から識字までの距離 (87) (山内 薫)	5
「うか」創刊15周年記念号特集	8
佐々木幸代 吉田より子 竹井真紀子 杉田ひろみ 宮澤義文 飯原智子 木下和久	
漢点字訳書紹介『日本語大博物館』 (岡田剛嗣)	17
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子)	20
東京漢点字学習会報告 (菅野良之)	24
ご報告とご案内	25
漢文のページ	27
漢点字講習用テキスト(初級編・第31回)	30
編集後記 (木下和久)	31

漢点字の散歩(二十九)

岡田 剛嗣



「漢点字紹介」は前号で終了しました。今号からは、従来のスタイルに戻ります。

吉本隆明氏逝く

先月・三月十六日、何時ものようにNHKのテレビニュースをつけて、朝食をとっていた。そこへニュースとしてはかなりの時間を割いて、吉本隆明氏の逝去が報じられた。同日未明であったという。

それは如何にも準備万端整った報道であった。その後のマスコミ各社の報道は、何れも「巨星落つ」というもので、これも周到に準備されたものに思われた。ただその報道には、「共同幻想」とか「国家」とか、「大衆の現像」という吉本氏の用いた用語が挟み込まれていて、普段のニュース報道とは異なった肌触りを残したのだった。

報道陣にはその準備の時間があれば、その時間を万全の準備に当てるのは当然である。そして吉本氏の逝去の報道は、その準備が充分整っていたことをも知らせてくれるものであった。

私はこの報道を耳にして、「巨星落つ」などとは全く感じなかった。とうとう来るものが来てしまったか、と身体の芯にぼっかり空いたウロを感じたのみであった。勿論氏の齢は知っていた。そしてこの数年の発言が、記者によるインタビューを起こしたものであったことも知っていた。しかし氏の死は、報道から受けるものとは全く異なった印象を、私に与えた。

私は強度の弱視者として生まれた。十九歳で全盲になり、文字の教育は全く受ける機会を得なかった。

現在も情況はそれほど好転してはいないが、当時の視覚障害者の読書環境は、極めて劣悪なものだった。文字の教育はなく、カナ点字による点訳書が僅かあるだけ、音訳がそろそろ始まったころであった。何れにせよ文字を知らない者が、漢字仮名交じり文をカナだけの表記に改めたものや、音訳者による読み上げに頼って読書しようというのであるから、極めて乱暴なものだったと言つてよいであろう。しかも盲学校の教師では、一般の学校の生徒へ言うのと同じ調子で、時あるごとに本を読めと言うのである。ある時校長の面談があった。校長はどんな本を読んでいるかと尋ねた。私は何も答えられなかった。校長の心象は誠に悪いものであったに違いない。が校長は、点字図書館に行けば、読む本は無尽蔵にあると、本当にそう信じていた様子であった。

盲学校を出た当時、山本七平氏がイザヤ・ベンダサ

ンの名で著した『ユダヤ人と日本人』という本が、ベストセラーになった。点字図書館には、ベストセラーはだいたい並ぶ。カナ点字と音訳書は、半年後には点字図書館の蔵書となった。

私はといえば、どんな本なのか知らないまま、興味本位に借り出した。その衝撃は今でも忘れられない。読後の印象は、中身を理解してのことではない。そうではなく、日本という国は不思議な国だ、なぜなら、とても読み易い本ではなかったからで、もしこんな本が本当に読まれて、しかもベストセラーになったなら、これはどういうことなのか、くらくらする思いであった。

同書が私にそんな衝撃を与えたのは、当時の報道には、中東の状況を、イスラエル対イスラム諸国と位置づけたものしかなかったからである。しかも多くは、イスラム諸国を善、イスラエルを悪として、イスラエルに対しては、批判的に終始していたからである。これは現在のマスコミにも、無批判的にそのまま受け継がれているように見える、あのベストセラーがあったにも関わらず。

同書によると、イスラエル国民の三分の一はアラブ人で、イスラム教を信仰していること、イスラエルの社会は当時のソビエト・ロシアや中国に比べても遜色ない、いやその理念から見ればそれ以上に社会主義的な平等理念を実現していること、さらに山本氏は別書

で、イスラム諸国は反イスラエルで一致して、足並みを揃えて行動しているとされるが、イスラエルから地理的に距離を置いている国ほど反イスラエルの声が高く、その発言も激越であることなどを述べておられた。

このようにして山本氏の本に出会って私は、テレビやラジオでは何も分からない、分かりたければ相応の努力をしなければならぬという、今にすれば誠に当然の辞儀に気付かされたのである。しかもこれも疑わしい、なぜなら、私は文字を知らなかった、そんな中でカナ点字や音訳で読んだ本から、どれほど読み取れているのだろうか？本当に読んでいるのだろうか？最も疑わしいのはこれであった。

しかしその方法が読書しかなないとすれば、できることから始めよう、そんな風に考え始めていた。そんな折りに友人が、吉本氏の本を読み聞かせようという、ある意味で暴力的な、しかしながらこの上ないありがたい話を持ってきてくれた。私が吉本氏の著書に出会ったのは、このようにしてであった。一般から見れば、極めて遅い出会いというほかない。そして山本氏の著書から得た、あの目くるめく思いを倍する衝撃を、氏の書物から受けることになったのである。

どういふ衝撃か、余りに大きいので、ここでは述べない。ただ吉本氏の著書に出会って以後、やっと世界の流行となっていた構造主義の書物の翻訳が始め

た。その中に、あのロラン・バルトの『零度のエクリチュール』があつた。何とか音訳していただいて、聴くことができたのだが、最初の印象は、これは既に知っている、というものであつた。デジャビュではない。吉本氏の言う「自己表出」と「指示表出」の概念には、既にテクストの自由を包含しているものと理解していたからである。言語表現は表現であつて、それ以上何も保証しない、ただテクストとして存在するだけだ、ということである。

私が氏の著書に触れる機会を得てから、できるだけその筆致に触れたいと思うようになった。そんな中の氏の発言を、追つてみたい。

八十年前後から世界を喧しく騒がせたのが、あの反核運動であつた。世界中の文学者・文化人がこれに賛意を表して、署名活動や抗議デモなどが行われた。わが国でも同様の行動が、各地で繰り広げられた。

吉本氏はそれに対して、反反核を称えて論陣を張つた。その骨子は、「この運動は、弱体化したソビエト・ロシアの仕掛けたもので、現にその対象は英米、西側の核保有国に限られている。もしそうでなければ、中ソへも運動の矛先を向けてはどうか？」というものであつた。今こう書けば、何のことはない、実に当然のことと解されるであろう。しかし当時はそうではなかつた。核兵器は悪いものだ、それを排撃しようというのだから、東西も上下もあるものか、反核はよいこ

とだから、よいことはやらなければならぬ、そんな風であつた。かつて私には直接知り得ない時代のこの核とアメリカの核は悪魔の核、ソビエトの核は正義の核と言われたことがあるという。その意味では、その言い方をそのまま引きずつた主張だつたと言えよう。(三・一一以降の反原発の主張にも、多分にこの傾向がないとは言えないのではあるまいか?)

その十年後あの長大なソビエト・ロシアは、脆くも破綻し瓦解した。氏がこれまで見通しておられたかどうかは知らない。があの反核運動を通して、冷戦構造の変化を予想されていたことは、間違いない。私はベルリンの壁が壊されるのに一驚した。私が生きているうちにこんなことが起こるなど、思いもよらぬことだつたからである。その時その前に、ベトナム戦争がアメリカの完敗で終わった時にも、同様の驚きを覚えたことを思い出した。私の分かる範囲とは、せいぜいこの程度のものだということ、思い知らされたのであつた。しかもベトナム戦争の終結も、ベルリンの壁の崩壊も、実際には何の解決でもなかつた。そこが勢力図の節目の一つにはなつたのであるが、その前後を眺めて、後の方がよくなつたと言える人が、どれだけいるだろうか?

九十年代に入ると、イラク軍がクエートに侵入し、アメリカとその同盟軍が抗戦して、イラクを追い出した。いわゆる湾岸戦争である。この戦争に対してわが

国の文学者が、反湾岸戦争を称えて、署名活動や集会やデモを行った。しかし戦争そのものが短期に終わったためか、戦争の終演とともに運動も消滅したように見えた。恐らく見えただけでなく、それが事実だったのであろう。吉本氏はその運動に対しては、じつと眺めているのみにように見えた。行く先が見えていたに違いない。

湾岸戦争当事者の一人である米大統領ブッシュの息子であるジョージ・ブッシュが二〇〇一年に大統領に就任した同年九・一一、ニューヨークの世界貿易センタービルのツインタワーが、乗っ取られた旅客機の自爆という、劇場映画の一シーンを見るような惨劇に見舞われた。その後ブッシュ大統領は、アフガニスタンとイラクを攻撃したが、その時は、その戦争に反対する文学者の、目立った活動はなかった。むしろ吉本氏の発言が、際だって聞こえた。曰く「国家は常に臨戦態勢にある。とすればアメリカを敵と見る者が攻撃して来ることは、予想の範囲である。しかも攻撃を受けた側であるアメリカの責任者である大統領が、それに抗戦するのも当然である。」

平和ぼけしている日本人にとっては、誠に耳を疑いたくなる発言ではある。しかしよく考えてみれば、前世紀にはわが国も、今戦争などなさそうな欧州も、未曾有の戦禍に見舞われていた。してみると、わが国も欧州も、現在が平和なのではなく、戦争ができないだ

けなのだ、それを平和と呼んでいるだけなのだ、と言えるのであろう。九・一一はその意味で、それまでの反戦運動のあり方に、強いノーを突きつけたことにな

る。最後に、氏が身体障害者についてどう言っているか見てみたい。

氏は、老年をどう捉えるかから説いておられる。老とは、齢を重ねることによって、社会から求められる生産性の水準を果たし得なくなることで、老年に達した人は、社会との関わりから言えば、税による富の再分配によって生活を支える必要がある。個人の差はあるにせよ、一定の年齢を越えれば、万人がその対象となる。身体障害者は、障害を得た時点から、老年に入ったと捉えることで、老人と同様に税による富の再分配を受けることができると思えばよいと言われる。

障害者の一人である私は、正直言って、強い反発を感じた。障害者の可能性をどう考えるのだろうか？と思うった。

しかしここで言う生産性とは、職業としてのそれで、職業人として障害者をどう位置づけるかということとを言っておられるのに気付かされた。と言うのは、実際に職業人として所得を得ようとすると、自らの判断で単独に動けることと、文書の読み書き、その他の情報処理の能力が求められる。視覚障害者を取って見ると、そのようにして一般の事務仕事をこなすことで

晴眼者と肩を並べることが、恐らく不可能である。できないところを何かで補うことが十全に行われることが、現在求められている、それはまだ、実現していないことである、と言われているのである。

吉本氏の著書は、ほとんど点訳も音訳もされていない。いや、もしカナ点字への点訳や音訳がなされても、文字の教育を受けていない者には、正に：に真珠、宝の持ち腐れということになるはずだ。視覚障害者である私は幸いにも、辛うじて漢点字によって漢字の世界を知ることができた。そして本会の活動を通して、文字や文学の専門書に触れることができた。これがないければ、吉本氏の著書に触れる機会に恵まれても、手も足も出なかったに違いなかった。氏は、間接的に、私を漢点字に結びつけて下さったのである。氏は、正しく「パウロのように生き」た方だった。

点字から識字までの距離（八十六）

野馬追文庫（南相馬への支援）（五）

山内 薫（墨田区立あずま図書館）

二月一二日の日曜日、福島市にあるクラッセふくしまを会場にJ B B Y子どもの本講習会が開かれた。この講習会は「子どもともっと本を楽しみたい！より深く子どもの本について学びたい！とお考えの方に向けて、子どもの本で世界をつなぐ活動を続ける日本国際

児童図書評議会（J B B Y）と、子どもの読書活動を支援する出版文化産業振興財団（J P I C）が開催します。」（開催案内）というもので、二〇一一年度は一〇回開催されている。プログラムは、「作家が語る一冊の本（仮）」と題して、絵本作家や児童文学作家などが自身の創作の舞台裏、創作に込めた思いなどを語る「特別講演」、「もっと子どもの本を楽しもう」と題してJ B B Y読書アドバイザーが読みきかせや紙芝居など、子どもと一緒に本を楽しむための大切なポイントや選書のヒントを話す「講義」、そして「本との出会いを広げるために」と題して、子どもの読書をめぐる日本や世界の動きを伝える「情報提供」の三部構成になっていて福島の他、宮崎、福井、滋賀、鳥取、愛知、長崎、和歌山、秋田、群馬と文字通り日本全国で開催されている。二月に開かれた福島の講習会では、はじめに『グリックの冒険』『冒険者たち』などの著者、斉藤惇夫さんが特別講演を行い、その後の講義をKさんが行った。講義の内容は臨床発達心理士としてスクイッグル遊びというプレイセラピーをつかって絵本に内在するセラピー性について話されたとのことだった。Kさんは折角福島に行くので是非南相馬にも立ち寄りたい、ついでには南相馬市立図書館のHさんに連絡が取れるようなら取りたいと要請を受けた。講演日の翌日は月曜日で図書館が閉まっており、前日一日の土曜日ならば、丁度毎月本を届ける日に当た

るので自ら車で仮設住宅に本を届けたいとのことだった。

「ちょうど、一日なので、いつも宅急便で送っているのですが、わたしどもの〈あしたの本〉で持っている図書館バスで、もって行くことにしました。現地のRさんにもご了解いただきました。二四箇所を二時間ほどで回れるとの事です。」

また、Kさんが南相馬市立図書館のHさんへ会って伝えたり確認したいことは以下の四点で、この点については私からもHさんにメールで伝えた。

「○図書館から仮設に貸し出したり提供している本もあるだろう、その様子を知りたいこと

○今後の支援の予定を伺えたら伺いたいこと

○今次々に震災、特に放射線に関しての子供向けの本などが、出版されている。これらを図書館に是非備えてほしい。もし予算が間に合わないようなら、〈あしたの本〉で購入寄贈することも可能。

○布の絵本・拡大写本を少し寄贈してきたい」

このような準備の元にKさんは南相馬市立図書館でHさんと会い、仮設住宅も数カ所まわってこられた。

二月の本として選んだのは八〇〇ページ近くの大部な『藤子・F・不二雄大全集』の『ドラえもん 一』

(小学館 二〇〇九年)と『だいくとおにろく』(松居直著、赤羽末吉絵 福音館書店)で、前回紹介した仮設住宅の本棚にマンガが一冊もなかったことから、何

かマンガをと選んだのが、ドラえもんで、最新刊と第一巻の両方に目を通し、ドラえもん誕生の経緯がわかる第一巻にしたのだった。

福島から戻ったKさんからのメールには次のように記されていた。

「昨夜、福島から戻りました。行くときは福島まで、新幹線。後は福島在住の友人の車で南相馬へ。友人が線量計を持たせてくれました。飯館・川俣などニュースで聞きなれた地名、そこでも刻々線量の変化があり、ときどきピーと警告音。そこは両脇に木が生い茂っているようなところを通過するとき。南相馬は意外と福島市などよりも線量が少ない。こんな貴重なことも友人のおかげで体験してきました。一度にはここには書ききれないほど、たくさんのことを心につめました。南相馬の空はとても美しい。でも寂しい、空虚な空気に満ちていました。生き物の生き生きした気配がない。一日でしたが、私たち以外のボランティアとは、仮設のどこでも出会いませんでした。今窓口になつてくださっているRさんはじめ社協の皆さんは本当によく付き合ってください、感謝のみです。Oさんも会議の前に駆けつけてくださって、やっぱり顔を合わせて、手をにぎりあって、それで交わした言葉はこれからの支援の支えでしょう。

図書館バスとは現地で落ち会いました。二四箇所全部回る予定でしたが、図書館バスに寄ってきてくれる

人がいたり（本は無料でプレゼントしました）オープン型の集会所では、係りの方がお茶を接待してくれたりで。結局九箇所！ごめんなさい。

結論を言うとはじめに行った一箇所のみ、ずいぶん本があったのですが、後は先日の写真（前号掲載）の状態とほぼ一緒。ラベルの本は中央図書館からの廃棄本。二箇所で、本への要望を聞いたとき、上中があつて下がない、というような声がありました。「ドラえもん」みならずといつてくれました。

現在二八箇所に、仮設が増えています。四セット増やす方向で考えます。

南相馬市中央図書館は信じられないくらいすばらしい図書館でした。ぜひ山内さん行ってみて！日本の宝かも。建物も図書も何の被害もなかったが、職員は半分もいない。しばらくは、もうだめだと

（心が）死んでいたとHさん。福島はもう国から見捨てられていくともいっていました。

でもこの図書館への図書購入費などの予算は、減らされるどころか増えたといっています。市の幹部の図書



仮設住宅の図書館バス

館への理解・愛着が大きいようです。なので、図書の寄贈などは必要ないようでした。業務もサービスも少ないマンパワーでやっているのです、〈あしたの本〉の仮設の支援はよろこんでくださっているようでした。結局二時間も、同行したJBBYの他の者も交えてお話やら見学をさせてくれました。」

Kさんが出したお礼のメールにOさんから次のようなメールが届いた。

「お会いできて嬉しかったです。バスもすてき！でした。継続して、ご支援いただけることは私たちの勇氣にもつながります。今後も、できうる範囲でご支援いただければありがたいです。本当に、お会いしたことの無い方たちから、静かなしつかりした支援をいただいていることに感謝しています。また、お会いできるような気がしています。」

また、Kさんのメールに答えて南相馬市立図書館のHさんは

「K様

メール、ありがとうございます。中央図書館の設計者、寺田芳朗氏がいかに優れた方であるかが証明された気がしています。昨日とおとといは、図書館がにぎわいをみせています。鹿島の仮設住宅の方も、カードを作りにみえました。また、県外に避難している方が、一時帰宅の帰りに寄ってくれました。かなり疲れているようでしたが、図書館がよりどころになっ

くことの重要性を痛感しています。Kさんのおっしゃるとおり、南相馬の誇りをとりもどすために図書館が輝きを失わないよう、期待にこたえていこうと思ひます。

また、お会いする日を楽しみにしています。H」という返信を下された。

Kさんが南相馬市を訪れた二〇一二年二月一日現在の南相馬市の仮設住宅は三三ヶ所で戸数は二、五八一に上る。中には六戸、一八戸、二二戸などの少数の仮設住宅もあるので、そのうち二八ヶ所に集会所があるものと思われる。またこれらの仮設住宅に入居している〇歳から一〇歳までの子どもの数は、流動的ではあるがおおよそ三〇〇名弱だとのことだ。仮設住宅の子どもの数は思ったほど多くはなく、高齢者が多いのではないかと思われる。毎月一日に送る本は絵本を中心とした子どもの本だが、読者層は子どもに限ることなく、広い世代を想定する必要があるようだ。

なお、三月一日は『放射線になんか、まけないぞ!』（坂内智之文、木村真三監修、柚木ミサト絵 太郎次郎社二〇一二）と『はなをくんくん』（ルー・クラウスぶん、マーク・サイモントえ、きじまはじめやく 福音館書店 一九七四）を二八ヶ所に発送した。

「うか」創刊15周年記念号特集

本会機関誌『うか』は、今号が九十一号を数えます。隔月に発行して年六回、丸十五年を経ました。滞ることなく続けて来られましたことは、誠に奇跡と言つても過言ではありません。ご執筆いただいたおります皆様、歴代の、編集にご尽力下さった皆様、また手作業で印刷・製本・発送に当たって下さっている会員の皆様、全ての皆様のお力が総合されて成り立って来た雑誌でございます。心より御礼申し上げます。

今号は、十五年を一つの区切りとして、記念号とさせていただきます。

岡田

羽化の会の活動に参加させていただいて

東京漢点字羽化の会 佐々木幸代

「佐々木さんは東京の活動にご参加下さって、丁度二年になります。佐々木さんは文中にもありますように、両足に障害をお持ちです。普段の移動は、車椅子とご自身で運転される自動車を利用しておられます。本会の活動にご参加いただいて、私どもも大きなインパクトを受けております。昨年度図書館に納入した『寺山修司歌集』は、佐々木さんがまとめて下さいました。ポテンシャルに満ちた若い女性です。」

東京漢点字羽化の会に初めて参加させていただいて

から、約二年が経ちました。体が不自由で家にいることが多いため、家で自分のペースでできる「点訳」が出来るようになり、うれしく思っています。

羽化の会に入る前に、点訳の通信講座を受講していました。そこで漢字を使用しない点字を習いました。でも、点字を読む課題で、ひらがなだけで書かれた文を読んでいて、地名や病名が出てきた時などに、「どんな漢字が使われているんだろう」と思う事が多かったです。「漢字を表す点字があるといいのに」と思いました。

その後、点訳活動をしているグループに入りたく、車イスでも通えそうな点訳グループをインターネットで探し始めた時、日本漢点字協会のホームページを見つけ、漢点字を知りました。ホームページに掲載されていた、漢点字考案者の川上泰一氏の、漢点字の事が詳しく書かれた随筆を読んで、「漢点字の点訳が出来るようになりたい」と思うようになりました。そして羽化の会のホームページを見つけ、羽化の会に参加させていただけることになりました。最初の頃は、アクサングラブの使い方や、マスあけのやり方などを覚えるのに時間がかかりました。点訳をしている中で少しずつ身につけてきましたが、知らない事はたくさんあり、これからも身につけたいと思います。

今まで読んだことのなかった短歌の歌集の点訳は面白かったです。現在やっている古語辞典では、読めな

い漢字がたくさんあることが身に沁みてわかり、漢字辞典を引くのに慣れ、読める漢字も増えました。

これからも、長く点訳を続けられたらと思います。いろいろ至らない点がありますが、これからもよろしくお願い致します。

常用字解プロジェクトに関わって

吉田より子

「吉田さんは、埼玉県嵐山町にお住まいです。現在『常用字解』の音訳の作業を進めております中で、特別の位置を占めておられます。このプロジェクトは、同書の漢点字訳のノウハウを生かして、多くの視覚障害者の読書の方法である音訳書にできないかという観点から、立ち上げたものです。吉田さんは触読は困難とのことで、漢点字へのコミットはなさらないようですが、現在多くの視覚障害者が同様の状況にあることを思えば、むしろふさわしい参加者と受け止めております。漢字の知識は持ちながら、漢字から遠ざけられている、そんな皆様の代表として、忌憚のないご意見をお聞かせいただけることを願ってやみません。」

私は、弱視から全盲になって10年になります。文字の音訳に頼るようになって6、7年にはなるだろうか。この目で文字を見ることが出来ない。読めない、書いてもそれをこの目では見る事が、読む事が出来ない

い。好きな手紙も読み書きできない。

流れるような見事な手書きのお手紙を目にするたびに、日本語って、やっぱりいいなー。きれいだなー。とうとうとりしたものだ。私も、このように書けたらなー。と憧れたものでした。少しだけですが、お習字の手習いをした事があつた。精神統一して一字一字、一字一句を書いていくひとときは良いものでした。見えなくなつてきて、日常生活の不便、不自由を覚えながらの生活には、心身ともに疲れるものでした。特に、文字の読み書き、解説の出来ないという事には恐怖さえ覚えた。この世の中、当然のごとく、全てにおいての情報が、まずは、文字だ。言葉だ。文章だ。人生の半分を過ぎようとしている頃から、それが出来なくなつてしまった。正直その頃の気持ちを取り返りたくない。一言では言えないし、身震いさえする。未練がましいかもしれないが、未だ見えたらなー書けたらなーとの思いがある。厄介です。

私達にとって、『音訳』には本当に感謝です。音訳がなければ、誰かが読んでくれないければ生活がストップしてしまふくらいに、なくてはならないものです。ありがたい事に聴覚の方は無事なのです。今更ながら本当にありがたいと思います。さて、その音訳ですが、聞いてるだけでは理解できない言葉が出てきます。同音異語は勿論、聞いてる途中から意味不明の言葉が気にかかり、後の内容がわからずじまいになることもし

ばしばだ。そんな折、このチームの一人の方に、私達が聞いてわかる漢和辞典のようなものがあるといいなー。とぼやいたのです。そのぼやきも忘れた頃に、このプロジェクトの事を聞きました。思わず「それって、私も参加させてもらう事ができるのかしら？」「勿論。一緒に行きましょう」と。そして、一年たちました。

最初は、白川静さんの『常用字解』？正直認識すらありませんでした。あれ？晴眼者使用の漢和辞典なるものの音訳版を想像してたのですが…。その思いはどこかに飛んでしまつて、「ふうん、漢字をこんな風にして解読していく。なんか楽しいなー」と興味津々でした。日本語ならではの言葉にも関心のある私、漢字のつくり、元々の意味などなど、聞けば聞くほど、知れば知るほど、楽しいのです。日本人に生まれて日本人として生きている喜びを今更ながらに深く深く味わっています。そして、このプロジェクトに関わらせて頂いてることに、皆様のお仲間に入れて頂いている事に、心より感謝でいっぱいです。ありがとうございます。そして、これからも宜しく御願致します。

私と漢点字

竹井 真紀子

「竹井さんは、東京で行っている漢点字の学習会にご参加してくださっている、視覚障害者の若い女性で

す。」

「記念冊子に載せるので、漢点字とのことで、なに
か原稿を書いてほしい。」

いつものように漢点字の学習会に参加していた折
り、そんな言葉をいただいた。

ムムム、何を書けば良いのだろう。頭はパニック。

自分の頭を整理するためにも、そもそもなぜ漢点字
を習おうと思ったのか、習い始めてどう感じているの
かを、まずはつらつら書いてみようと思った。

数年前、ひよんなことから漢点字の勉強を始めるこ
とにした。きっかけは、とある雑誌の記事だった。

その頃の私は、ちょうど職場でパソコンの要約筆記
や速記の仕事を任せられるようになり、とにかくパソコ
ンの入力スピードをあげることが課題だった。どうし
てもローマ字入力ではスピードに限界がある。しかも
私は音声読み上げソフトが入っているパソコンを使用
しているため、漢字の変換を行なうのに目の見える方
よりも多少時間がかかってしまう。タイピングミス
すればなおさらである。

もっと効率的に、もっと正確な漢字を入力する方法
はないだろうか。

要約筆記をやっているという人にも相談をしてみ
た。ローマ字入力ではまずスピード的には不向きだ
し、そもそも速記や要約筆記は数人で交代しながら行

なうものだとということを教えていただいた。しかし、
職場では人件費のこともあり、チームを組むことは難
しい。

同時期、たまたま友人が会議などの録音物を起こす
仕事に就いた。彼女から会議録を期限内で作成するに
は、特別な入力方法をマスターする必要があることを
教えてもらった。いわゆる6点漢字を利用したひらが
な入力(?)である。この入力方法をマスターすれ
ば、タイピングミスがない限り、入力スピードは上が
るのだそうだ。さっそく友人が通っていた学校に問い
合わせの連絡を入れてみた。

結果、マスターするにはストレートで1年は最低か
かること、休日の講習はやっていないので、平日通わ
なくてはならないことが判明。もしテキストなどが手
に入るならば、独学もできなくはないが難しい、とい
うことも教えていただいた。

テキストはちよつと手に入らなかつたので、とりあ
えず6点漢字だけでも学習してみよう、その後のこと
はまた何かのきっかけで良いアイデアが浮かぶかも
しれない、そう思い6点漢字のリストを取り寄せて勉
強を始めてみた。結論、独学でマスターしようなんて
甘い考えでした(笑)。

結局、地道にローマ字入力で、タイピングミスをな
くしていくことにし、すぐに変換できない漢字は辞書
に登録しておくか、とりあえずひらがなにしておき、

まずは相手に一つでも多くの情報を伝えられるように勤めることにした。その代わり、筆記終了後に、入力データを清書して渡すように心がけた。

ある日。たまたま雑誌で漢点字の勉強会の記事をつけた。場所は横浜だったが、月1であれば通えそうである。自分ひとりで学ぶのは難しかったが、何人かで学習するのであれば少しでも覚えられるかも知れない。さっそく問い合わせをしてみたところ、ナント！私が問い合わせたのは漢点字の学習会。とても驚き。漢点字に近づいたような遠のいたような複雑な気分だった。勘違いをお詫びして学習会への参加はあきらめることにしたのだが。それから1ヶ月ほどして。「今度東京でも学習会をすることにしましたが、参加してみませんか？一応漢点字にはなるわけですが、こちらでも楽しいと思うので一度遊びにこられませんか？」というメールをいただいた。正直びっくりしましたが、勘違いした私にもお誘いをいただけるなんてとても驚いた。とりあえずなにかのチャンス、東京なら近いので長い目で通えるかもしれない、そう思い少しずつ学習会に混ぜていただくようになった。

ながながと書いてしまったが、これが私と漢点字との出会いである。

参加してみると、みなさんとてもきさくな方で、人見知りの私でもすぐにお話できるようになった。参加

してみてもうれしかったのは、点字のテキストとともに、レーズライターに漢字を書いていただけのこと。私は小学校の頃、点字の教科書を使いつつ、ノートはほとんどレーズライターでとっていたので、レーズライターで漢字をみていると、ある種の懐かしさとともにとても安心感を覚えたのだ。漢点字の規則を覚えつつも、漢字の由来を聞いたり、漢字の形から由来を想像するのも楽しいと思う。

たとえば、ウサギ(兔)という字は、下の部分がウサギのアシを模していること、黒という字は、屋根の上の煙突を模していて、横の線は煙突の中の煤らしいということ。

三つ巴という言葉は知ってはいたが、あんなにもその図像が複雑な形をしていることなどは知らなかった。おかげさまでいろんな漢字の知識が増えた。また、今まで勘違いしていたことも新たに覚えなおすことができた。丁字路はその代表的な漢字だと思う。私は丁字路はアルファベットのTがなまった言い方なのだとずっと信じていたのだ。そのような勘違いは意外とたくさんあるようだ。また、日常パソコンで変換するおりに勘違いして変換していた漢字も多くあったように、なんともお恥ずかしい話である。

漢点字はまだまだすぐには読めないものばかりであるが、ときどきテキストの一部が読み取れたり、テキストに載せてある歌の歌詞が読み解けるととてもうれ

しい。

友達の名前の漢字が出てきたり、漢点字独特の記号に気持ちが悪くするとそれもうれしい。なにより学習会でみなさんとお会いできるのがとてもうれしく思う。

最後に。要約筆記の件はどうなったかというところ。なにかかんとか今もローマ字入力で行なっている。入力方法は結局変更できなかったが、漢点字の学習会に通っているおかげで、前にも増して漢字の変換に自信が持てるようになった。逆になんでもかんでも漢字にせず、あえてひらがなで書く（見える人的には「基本この字はひらがなかカタカナだよ」という文字のことであるが）ことも入力仕分けができるようになった気がする。小さなきっかけでもなにかにつながるなど、この学習会を通じて改めて感じている今日の頃です。

羽化の会の活動に参加して

東京漢点字羽化の会 杉田 ひろみ

「杉田さんは、東京で二〇〇五年に羽化の会を立ち上げた当初からの会員です。この秋で丸七年を数えます。それだけに活動には欠かせない方のお一人です。現在は、『岩波古語辞典』のまとめをお引き受け下さっておられます。」

「うか」創刊十五周年おめでとうございます。十五年間、隔月の発行を一度も休むことなく続けられたとのこと、岡田さんをはじめ関係者各位の漢点字に対する熱い思いが伝わってきます。

健康には自信があった私ですが、思いもよらず大病を患いました。幸い早期発見だったのと先生の適切な処置により元通りの体になりました。いただいた命を何かの形で恩返しできればと思っていた矢先、漢点字講習会の新聞記事を読み「これだ！」と思いました。いわゆる「ビビビ！」という感じですが。引っ込み思案の性格で、知らない世界に足を踏み入れるのは勇気が要りましたが、きつと赤い糸で結ばれていたのですね。ドキドキしながら会場に向かったことが、ついでこの間のことのように思い出されます。

講習を終えて東京羽化の会の活動に参加するようになってから、早いもので6年が経ちました。最初のうちは入力規則の難しさに戸惑うことも多々ありましたが、いろいろなものを入力し経験を積むことにより今ではだいぶ慣れてきました。難漢字を字式で表わすことも新鮮でとても楽しいです。漢字の素晴らしさ、奥の深さを再認識するとともに、まだ漢字を知らない視覚障がい者の方にも是非お伝えできればと思っています。いろいろなものといえ、会に参加していません。

たら手にすることはなかったであろう本と出会えることも楽しみの一つです。

そしてもう一つ、岡田さんの博学と勉強熱心なお姿には本当に頭が下がります。何かに真剣に取り組むことの大切さを教えていただきました。

会では現在「岩波古語辞典」に取り組んでいます。古語辞典を一語一句こななにじっくり読み込んだことはありませんでしたが、日本語の変遷や見たこともない漢字に触れ、発見することがたくさんあります。今回初めてまとめ役を仰せつかりました。大役を果たせるのか不安ではありますが、皆さんのお力を支えに作り上げようと思っております。

また、学習会ではレーズライター作成を担当、テキストに沿って岡田さんと相談しながら文字を決めています。1枚最大8文字、教科書体の字体で下書きしたものをなぞり、木村さんに作っていただいたラベルを貼り、裏にコピー用紙を貼って完成です。受講者の方が喜んでくださることが何よりの励みとなっております。

皆がそれぞれの役割を果たし、一つの目標に向かって協力し合える会の一員となることができ、以前よりも充実した日々を過ごせています。これからも漢点字の普及の一助になれるよう、微力ながら頑張っております。

横浜漢点字羽化の会に参加して

横浜漢点字羽化の会 宮澤 義文

「宮沢さんは昨年秋の、横浜の会員募集の講座にご応募下さり、既に本会の欠かせない力となって下さっております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。」

「漢点字のボランティア、漢点字って何かしら」と云われてから半年が経ちました。

一年ほど前会社を退職し、これといった趣味もなく、暇をもてあますようになった頃。外出すると、老年層の人がやけに目につくようになったり、「席にお座りください」と席を譲られたり、まだ若いつもりでいたのですが、このように見られるようになったかと、真剣に「何かしないと」と思い。私に出来るボランティアはないかと、社会福祉協議会に出向いたり、インターネットで検索したり、そこで、NHKボランティアネットで漢点字講習会が目にとまりました。妻が、以前仮名点字をしていたこともあり、身近に感じました。仮名と違い、漢字は見れば、いや、触れれば意味がわかりやすい利点がある：続けられるかどうか：講習会を受けることにしました。

三回の講習を通して、漢点字の成り立ち、まだまだ

普及させなければならぬこと、漢点字を待ち望んでいる人がいることを知り、また、パソコンを使い一定のルールに従い入力し、漢点字化を試みました。

講習終了後、斎藤茂吉歌集を七人で漢点字化に取り組むことになり。文語体の歌集に四苦八苦しました。

入力マニュアルを見ながら、判断に迷いながら、入力を再発見？皆さんの正確さが、いい刺激になりそうです。完成版を手にするのが今から楽しみです。「常用字解」や機関誌「うか」の漢点字散歩をめくると、形声文字、表意文字、会意文字等懐かしく、又、新鮮に心に響き、文字の楽しさを再発見させられています。

定例会や、新年会等を通して、やっと、名前と顔が一致するようになりました。今は、マニュアルを参考に、パソコンへの入力、また、印刷の手伝いなど活動しています。「私にできるかな」という一抹の不安があります。一歩踏み出して、続けてみようと思いません。これからは、経験を積み重ねて、いろいろな分野の漢点字化に参加させていただき、また、入力から校正・編集・印刷・製本・発送（納入）等一連の作業にも関わりたいと思っています。

「毎日が日曜日」だからこそ、今始めたボランティアと散歩や旅行など日常のたわいのないことで楽しみや、喜びを見いだしながら、「いま」を大切にしたい

と思っています。

このボランティアが長く続き、年老いたときによい思い出となつて、笑つて話が出来るよう、自分なりに精を出してみようと思っています。

羽化の会に入会して…そしてこれから…

飯原 智子

「飯原さんは、一昨年に横浜で行った、会員募集の講座にご応募下さり、活動にご参加いただいております。誠に貴重な、新しい力のお一人です。」

羽化91号の発行おめでとうございます。私自身は、1年半ほど前から参加させていただいておりますが、実際には積極的な活動ができていた状態ではありませんので、このような記念号に文章を載せるなどお恥ずかしい限りです。

今年は今でもかと思うくらいに寒い日が続き、ようやく春の訪れを感じる芽吹きを目にすることができるようになりました。寒かった分花々達も待ちに待ったと言わんばかりに勢いを持って開花しているようです。穏やかな春ではありませんが、最近の日本は考えさせられることが尽きない状況です。首都圏での社会生活は通常に戻つてはいるものの、1年前の震災からの

復興も目に見えて進んだという感には程遠く、現地で生活される方々にとつてはまだ辛い日々が続いています。羽化の会の活動にも言えますが、自分が関わらない限り触れることのない世界は非常に広い範囲に存在していて、その世界に踏み行っていくことには常に高いハードルがあります。自身の15年を振り返ってみると、日々の生活に追われる毎日で自分のことに精一杯でした。ふと振り返ったときに、自分にできることは何であろうかという問いに答えは見つからずに過ぎていました。

羽化の会との出会いは、たまたま目にした新聞記事の講習会案内でした。そして、講習会に参加し、良く分からないまま入会し、少しだけ入力のお手伝いをさせていただいて今に至っています。参加するまでは、ボランティアってどのように活動するのか、仕事の合間に参加することなどできるのだろうかと不安な気持ち一杯で、現在でも中々時間が取れずに落ち込むこともありますが、ようやく少しだけペースが掴めてきたところですが、まだ出来ることも限られており、どちらかと言うと足手まといの感はぬぐえないのですが、まずは参加することが一番と考えるようにしています。未熟ではありますが、皆様のご指導のもと継続して活動に参加できればと思っておりますので、これからもよろしくお願いいたします。

「うか」15年…感無量

木下 和久

私がこの「うか」の編集を前任者の宇田川幸子さんから引き継いで、すでに6年を過ぎました。号数にして37号分です。これだけ長期間、編集に携わってきて、作業に慣れたといえそうですが、いかにもマンネリ的になったのではないかと、反省しきりです。

更に、皆さんお気づきのことと思いますが、表紙絵を担当して下さっているのは岡稲子さん。この方が表紙絵を担当して、毎回新しい絵を提供して下さいますが、数えてみたら第21号から1回も欠かさずつとで、満12年にもなるうとしています。

毎号欠かさず主要な記事を提供して下さいる代表の岡田さん、創刊号に近い初期の頃から欠かさず内容豊富な原稿を下さっているあずま図書館の山内さん（もと緑図書館勤務）、例会報告とともに素敵なエッセイを書いて下さる木村さん、毎回丹念な学習会報告を書いて下さる菅野さんなどの常連執筆者の存在によって、この機関誌が存在し続けてこられました。本来にありがとうございました。この15年という長い年月の経過を振り返ると、感無量の思いを強くします。今後也更なるご協力を御願いたします。

漢点字訳書紹介

『日本語大博物館』

岡田 健嗣



平成二十三（二〇一一）年度の、横浜市中央図書館への納入書として製作しました漢点字書をご紹介します。

紀田順一郎著、『日本語大博物館』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇一年）。

この書物は、一九九四年にジャストシステムから刊行された、同じタイトルの書物に増補されたものです。「悪魔の文字と闘った人々」とサブタイトルされていて、わが国の活字文化を、著者ならではの綿密な調査と筆致で跡づけた、極めてユニークな書物です。写真や図版を豊富に掲げつつ、印刷技術の変遷と、その技術に準拠して産み出された多くの書物を紹介しています。漢点字版では、写真や図版はその説明に留まらざるを得ませんでした。それでもここに登場する人々の並々なぬ力と心を、十分に受け止められるものに仕上げられたと信じます。まずは目次からご紹介しましょう。

《『日本語大博物館』目次／第一章 幕末活字顛末記：活字に憑かれた人々／第二章 活字との密約

：「莊嚴なる森」に魅せられた人々／第三章 起死回生の夢：昭和活字文化の七〇年／第四章 ことばの海に漂う：諸橋轍次と大槻文彦／第五章 カナに生き、カナに死す：カナ文字運動の理想と現実／第六章 ローマ字国字論の目ざしたもの：田中館愛橘、田丸卓郎と日本のローマ字社／第七章 日本語改造法案：人工文字に賭けた人々／第八章 漢字廃止論 V S ・漢字万歳論：国語表記論争の過去と現在／第九章 縦のものを横にする：横に書いた日本語の歴史／第十章 営々と刻まれた一点一画：ガリ版文化の八〇年／第十一章 五万字を創った人：石井茂吉と写植の創世記／第十二章 毛筆から活字へ：邦文タイプライター開発夜話／第十三章 日本語の工学的征服：ワープロ第一号機の誕生まで／第十四章 一億人のデータベース：電話帳の過去・現在・未来》

ここに取上げられているのは、ハードウェアとしての印刷技術の変遷と、ソフトウェアとしての書物の編纂事業です。何れも明治以降のわが国に取って、初めて直面する、国民国家の威信にかかわる、言い換えれば欧米諸国では既に果たされている、輸入の利かない、わが国独自に解決しなければならない事業でした。

《大槻文彦が、その勤務先である文部省から国語辞書編纂の命令をうけたのは、明治八年（一八七五）、

彼が二十九歳のときであった。(中略) 依頼する側も、辞書づくりなど簡単な仕事と思っていた節があるが、依頼される側も『ウエブスター英語辞典』を翻訳すれば何とかなると考えていた点で、同じようなものだった。／＼ところが、語彙をひろっているうちに、日本語特有の語彙には自分で語釈をつけなければならぬことに気がついた。(中略) 「言葉の海のただなかに權緒(とうしよ)絶えて、いずこをはかどさだめかね、その遠く広く深きにあきれて、おのがまなびの浅きを恥じ責むるのみなりき」と、彼は当時の当惑ぶりを回顧している。≪

あの『大言海』の大月文彦の回顧です。

国語辞典の編纂もわが国では初めてでしたが、それを印刷し刊行する技術も、同時に開発されなければなりませんでした。

諸橋轍次は、『大漢和辞典』の編纂に一生を費やしました。大修館書店はその刊行に当たって、石井茂吉に印刷を依頼しましたが、石井の手元には、組み版を組むだけの活字がありませんでした。一つ一つ活字を手作りしましたが、それも全て戦火に焼かれてしまいました。

戦後石井は活版印刷を諦めて、次世代の印刷技術である写植の技術に取り組んで、『大漢和辞典』の刊行を成し遂げました。

この二つのエピソードだけでも白眉というにふさわしいものです。しかし私には、もう一つ気になった記載がありました。それはカナ文字運動とローマ字運動についての記述です。

明治になると欧米から怒濤の如く物品や文化が流入しました。わが国のあらゆるものが、それに置き換えられて行きました。当時の人々には、わが国古来のあらゆるものが、非効率に見えていたようです。効率こそが、国力の源、国の富の源と考えられていました。(もっとも現在の私たちの身の回りの品々も、西洋由来の物ばかりですが。)

言葉も例外ではありませんでした。英米では会議の場でタイプライターを打って議事録を作成し、その場で出席者に配布するという、手品のようなことが普通に行われていました。それに引き替えわが国の言葉は、とてもそのような行きません。そこで漢字廃止論が擡頭し、一つはカナ文字運動に、もう一つはローマ字運動にと展開されて行きました。

私とその辺りに感心を惹かれたのは、日本点字の考案者石川倉次が、後年カナ文字運動に身を投じたというところにあります。具体的にどのような運動を展開されたか詳らかにしませんが、日本語点字を、カナ文字に留めてしまった理由も、その辺りにありそうに思われるのです。

また明治期の日本語の表記には、大きな揺らぎが見られます。以下は、放送大学の印刷教材にある記述です。

《平仮名・片仮名は、古くからいろいろの字体が自由に使われていたが、国語教育では、明治三十三年の小学校令で、平仮名も片仮名も一つの字体に統一され、それ以外の字体は使用を認められなくなった。この規定は、明治四十年の小学校令の改正に伴って削除されたが、その後も、国語教育においても一般社会においても、この考えは踏襲され、今日に及んでいる。

この規定以外の字体の仮名を、「変体仮名」と呼ぶようになったのは、この明治三十三年の小学校令以来のことである。／ 仮名の統一が行われた際、字音仮名遣いも簡略化され、いわゆる棒引き仮名遣いが行われることになった。たとえば、「運動」をウインドー、「登校」をトーカーと表記する仮名遣いである。この仮名遣いは、小学校令の改正を受けて、明治四十一年に削除され、もとの字音仮名遣いに戻った。／ 漢字の字音以外の仮名遣いは、明治の初めから歴史的仮名遣いが行われてきたが、昭和二十一年に「現代かなづかい」が告示され、それまでの歴史的仮名遣いから表音的な仮名遣いへと改められた。「現代かなづかい」は、昭和六十一年に一部改訂され、「現代仮名遣い」として告示された。「現代かなづかい」に比べて、制

限がゆるやかになっている。》（坂梨隆三・月本雅幸著『日本語の歴史』放送大学印刷教材、二〇〇一年）

つまり日本語点字は、明治三十年代の八年間に施行された小学校令のまま現在に至っていること（棒引き仮名遣い）、そして漢字の非効率によるカナ文字の採用ではなく、カナ体系しか作られなかったことによつて、漢字を修得する機会を得られない者を産み出したことに、私は強く関心を惹かれたのでした。しかも同書に引用されるカナ文字運動・ローマ字運動を推進する方々の論文は、明らかに漢字仮名交じり文で書かれているものでした。つまり、カナ文字運動・ローマ字運動の推進者の方々は、全員漢字の知識をお持ちである、いや豊富にお持ちである知識人ばかりであることを確認したことが、私にとつて、一つの収穫であったことは間違いありません。屋上屋を重ねることになります。現在の先天の視覚障害者は、現在通用されている日本語点字によつて、漢字を修得する機会を奪われているという事実を、とりわけ教育関係者には心していただきたいと思います。

以上、同書の趣旨とは異なった読み方にはなりませんが、著者・紀田順一郎氏の幅広い見地に、圧倒される思いで読しました。

同書の漢点字版は、東京漢点字羽化の会で漢点字訳し、横浜漢点字羽化の会で印刷・製本しました。

「東京漢点字羽化の会」例会・

講習会報告とわたくしごと

木村 多恵子



第75回例会 2011年2月8日(水)13:30~

15:30 場所 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

横浜中央図書館へ納入の、『日本語大博物館』と、『寺山修司歌集』、どちらも全3巻のデータを、岡田さんと齋藤さんが、まとめてくださり、横浜羽化の皆様に、印刷、製本をしていただいて、近々納めることができるようになった。本の選定からはじまって、入力、校正、そのほかこまごまとした作業まで、皆様本当にありがとうございました。

何時ものように、朝日「花をひろう」の、2月11、18、25、3月3日の、当番の組み合わせを決めた。

2月15日の横浜での点字印刷には、お一人の方が行ってくださることも打ち合わせた。ありがとうございました。

新しい会員募集をするために、5月9日、5月23日、6月6日を講習会に当てることにした。

内容は前回と同様である。

締め切りは4月末日。

往復葉書で受け付けて、菅野さんが、事務を担当してください。

羽化の活動報告と、募集要項を、会員のお一人に、NHKボランティアネットと、東京ボランティア市民活動センターとBVI B Gボランティアネットに配信していただくことにした。文案は木村が作るべきだが、岡田さんにお願ひしてしまった。

詳しいお問ひ合わせは岡田さんへ。

古語辞典については、やはり細かい打ち合わせをした。

「国際発音記号」の点字表記が必要になり、「日本点字表記法」の「発音記号」を参考にすることにした。

第76回例会 2011年3月7日(水)13:30~

15:30 場所 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

いつものように、3月10、17、24、4月7日の「花をひろう」の入力担当グループを決めた。

3月21日の横浜での点字印刷をしていただく方を決めた。よろしくお願ひいたします。

羽化91号の原稿を依頼した。お一人が書いてくださったが、もう何人かお願ひした。

古語辞典に出てくる「古代朝鮮語」の表記について、さらに詳細に決めた。

古語辞典の入力用原稿をそれぞれ持ち帰られた。

ボランティア保険の、新年度の再加入の手続きをに会長にお願ひした。

「羽化」90号を皆様にお送りした。

* 予告

4月の例会(第77回)、2012年4月11日(水)

ヒューマンプラザ7階第一会議室、13:30～15:30

4月の学習会(第60回)、2012年4月21日(土)

ヒューマンプラザ7階第一会議室、18:30～20:30

5月の例会第78回、講習会(1) 2012年5月9日(水)、ヒューマンプラザ7階第一会議室、12:00

例会、13:30～15:30 講習会(1)

5月の学習会(第61回)、2012年5月19日(土)

ヒューマンプラザ7階第一会議室、18:30～20:30

講習会(2)、2012年5月23日(水)、13:30～15:30、ヒューマンプラザ7階第一会議室

6月の例会(第79回)と、講習会(3)、2012年6月6日(水) 13:30～15:30、後半は例会を含む。

6月の学習会(第62回)、2012年6月16日(土)

ヒューマンプラザ7階第一会議室、18:30～20:30

7月の例会(第80回)、2012年7月11日(水)

ヒューマンプラザ7階第一会議室、13:30～15:30

7月の学習会(第63回)、2012年7月28日(土)、ヒューマンプラザ7階第一会議室、18:30～20:30

2011年11月

わたくしと

昨秋、2011年11月の、とある日、二度と得られ

そうもない機会を得て、ステンドグラス製作工房へ連れて行っていただいた。

なぜこのような機会が与えられたかというところ、わたしが所属しているキリスト教の教会で、古くなった教会堂を建て直すことになった。教会が出来上がり、パイオルガンが入った。わたしたちは、可能ならばステンドグラスも入れたいと願う、幸いにもその思いが叶えられ、そのステンドグラス設置の完成が近づいたからである。

教会の信徒の中から選ばれた「ステンドグラス設置委員会」の一人Kさんが、デザイン画を描くので、わたしたち信徒の希望を取り入れるために、聖書に纏わるどんな場面、あるいは物を絵模様に取り入れたいのか、具体的に幾つかピックアップして、アンケートをとってくださった。これならわたしにも考えられる。わたしは麦の穂と、ブドウと、虹を選んだ。

委員会が依頼した工房での作業が順調に進み、最後のデザインチェックをしたら、委員会が行くので、教会員で見に行きたい人はどうぞ一緒に行きましょう、と言ってくださったのである。わたしは迷った。でも、せめて工房の皆様のお話を聞きたい、実際に作っているところの雰囲気、空気を味わってみたいと思い、決心して牧師と、委員長にお願いした。「行きましょう、行きましょう」とお二人とも言うてくださり、当

日牧師が我が家まで迎えに来てくださった。

車中は牧師とKさんの静かな会話で、わたしは後部座席で静かに緊張していた。

委員長とは現地で落ち合った。

工房に着くと、Kさんが、応接間や工房のあちこちにいろいろなステンドグラスが飾ってあると説明してくださった。

作業場の入り口には、「マリアの結婚式」と題するステンドグラス、高さ7、8メートル、横3メートル以上はありそうな大きさで、Kさんが「これはマリア様を持っている花束、これはマリア様の衣裳の裾（もすそ）を支えている少女、ここはヨセフさん」と触らせてくださった。わたしにはその違いを区別できなかったが、その全体の大きさだけでもすごいな、と感嘆した。

社長のUさんは、わたしだけのために簡単にステンドグラスを作る工程を説明してくださった。

「まずデザイン、どういう構図にするか決めます。製図を引いて、型紙を作るんですよ。ガラスのパーツ一つ一つが分かるようにね。それから、それぞれの模様に合わせて色を決めて、ガラスをカットするんですよ。このガラス切りは結構神経を使いますよ。ちょっと切つてごらんさい」と、これは委員たちに勧めていた。「小さいガラスのパーツを、これは後で見せますがね、鉛の棒にはめて、その鉛とガラスを固定

するためにはんだ付けするんです。そして、これら全体をまとめるために鉄のフレームにはめるんです。」

そして、早速社長のUさんは委員の人たちに実際にガラスのパーツをデザイン画の上に並べて、教会が注文したデザインであることを確認した。そしてこのステンドグラスの模様をはっきり見られるように、ライトを当てていらした。委員たちは「おー！」と喜びと感動の声を上げていた。

それからUさんは、ガラスのパーツ一つ一つを「これはブドー、これは麦の穂、これはお魚、これがパンを盛った籠です」と言いながら、わたしに持たせて、ゆっくり触らせてくださった。お魚は、わたしの手で触つても、目も口も尻尾もよくわかった。ブドーはとも大きく、実物大といった感じだった。わたしが驚いていると、Uさんが、「そうです。ブドーは意外に大きく作るんです。そうしないと模様の中で全体より小さくなってしまうんです。特徴としては丸いだけですからね。それに比べてお魚は目や口、尻尾と形が立体的に作れるからです。」と補足してくださった。

Uさんが「うちのスタッフが一番受けたのは、このパンと籠ですよ、みんな「ほー」って言ってます。ブドーや麦はよく使いますが、パンと籠の取り合わせはめずらしいですからね」といつてらした。

ガラス板の厚みは8ミリで、ガラスのパーツ一つ一つの大きさは、模様に応じて、ばらばらで、30ミリか

ら90ミリのものだという。

Kさんは、ガラスをカットしてみて、「なかなか難しいですよ」と教えてくれた。

このガラスのパーツを固定させるために、鉛の枠が用意されている。これは幅15ミリくらいはあったらどうか？鉛の長い板（いた）状の棒の両面に、8ミリのガラス板がはまるレーン状の溝が作られている。この両面の溝にガラスのパーツをはめ込む。そしてカットされたガラスの角度に添って、鉛を曲げて、ガラスを固定させるのだという。

Uさんは、わたしにも、お魚やブドーのパーツを鉛の両面にはめさせてくださった。

次にガラスと鉛をはんだ付けするのだという。このはんだが乾くと美しい銀色になるのだそうだ。「わたしたちはこの瞬間を見慣れているのですが、それでもいつも感動します。」とUさん。

ガラスの色は、ここでガラス板を作る段階で金属（金属の名前は何種類もあり、覚えられなかった。）を入れたので、既成のガラスよりきれいな色が出せました、とうれしそうに話してくださいました。そして赤、青、緑、クリーム色、それに本来のガラスの色だという。

ガラス板が8ミリなのは、これ以上厚くすると、光を美しく通さない、薄すぎではガラスの強度が保てな

いからだと説明していただき、なるほど、と思った。でも、わたしには、触っていると、もつと厚みがありそうに思えた。きつと不思議なポリウム感がそう思わせたのだろう。

わたしがパーツを触らせていただいている目の前で、工房の方が、パチパチと見事な早さでパーツを鉛にはめていた。

「クリスマス前には間違いない設置できますよ」とUさんは太鼓判を押していらした。

足場を組むこと、その他具体的なことを相談しているあいだ、わたしは高いところでの作業なので無事にできますように、と祈った。

帰りの車の中で、社長さんがことのほか親切だったことを感謝した。きつと委員長が前もって視覚障害のわたしが行くので宜しく願いますと頼んでくださったのだろう。

工房見学の翌日、委員長にお礼の電話をかけると、「いや、あの社長のUさんは、とてもいい人なんですよ、芸術的にも人間的にも、ですから、僕も大好きなんです。Uさんも喜んでいましたよ」と言ってくださいました。

牧師には翌日教会で直接「ありがとうございます」と言うと、「いやいや、それより、楽しかったね」と言ってくださいされたのが、とてもうれしかった。

教会は、2011年のクリスマスマス礼拝と、午後の祝会（しゆくかい）に、U社長をお招きしたので、わたしは、改めてお礼のご挨拶をすることができた。

ステンドグラスが設置された今、一番下の窓枠さえ触ることもできないほどの高さにあるものの、麦の穂やブドウや魚などを、この手で触れたうれしさが、ときどきよみがえってくる。

教会のステンドグラス1枚の大きさは、横542ミリ、高さ1035ミリで、これが一つの窓に4枚ずつ、計24枚設置された。

講壇に向かって右の窓三つは、旧約時代を象徴したもの、雲間からの光、オリーブの葉を啜えた鳩、虹、オリーブの実、燃える芝、いちじくの実。左側は新約時代を象徴して、星、小羊を抱いた羊飼い、麦の穂、パンを入れた籠と2匹の魚、荒れ狂う波、ブドウの実である。

もちろんそれぞれの絵柄にはキリスト教的な意味があるが、これについては省かせていただく。

今はあちこちの観光地に、ガラス工房はあり、ステンドグラスの製造過程もかなり詳しく見られるようではあるが、我が教会のステンドグラスの組み立て作業の様子をこんなに間近に見ることができたのだから、やはりあのととき決心して連れて行っていただいていた。

2012年4月6日 金曜

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成23年度 第11回（第57回）報告

1 日時 平成23年2月18日（土）18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 周知事項

学習会日程 平成24年3月17日（土）18時30分～

「うか」第90号配布

『日本語大博物館』、『寺山修司歌集』を中央図書

館へ納入。

5 使用教材

漢点字学習用テキスト初級編 第五回（全十回）

6 学習内容

初級編第五回

6 基本文字（4）

2. 漢数字（二）

今回の学習（前回の学習は省略）

（8）「辛」十（ロ・二・四・五の点）と立

（マ・一・三・五・六の点）で表す。字式は立・十。

音読みのシンは漢・呉音。訓読みに「かろうじて」がある。熟語には「甘辛（あまから）」「唐辛子」「香料」「辛口」「辛艱（しんかん…つらいなやみ）」「辛辣」「世知辛い」「命辛々（いのちからがら）」「見辛い（みづらい）」「辛夷（こぶし・モクレン科の落葉高木。早春、葉に先立って芳香ある白色六弁の大きな花を開く。「北国の春」の歌詞に出て来る）」

*「永字八法」…「永」の中に習字の筆跡の八種が含まれている。

平成23年度 第12回（第58回）報告

- 1 日時 平成24年3月17日（土）18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者（省略）
- 4 周知事項
- 5 次回学習会日程 平成24年4月21日（土）18時30分～
岡田さんの「ガイドヘルプ事業」、「自立支援法」等に関する所感。
- 6 学習会内容
使用教材 漢点字講習用 テキスト初級編 第五回
6 基本文字（4）
2・漢数字（二）

今回の学習（2月の学習会とほぼ同様のため省略）

「報告とご案内」

一 賛助会員のご芳名

平成二十三（二〇一一）年度に、賛助会費をご納入下さいました皆様のご芳名を、謹んでご報告申し上げます。

村田忠禧様、日本漢点字協会・川上リツエ様

雨宮絢子様、武田幸太郎様、河村美智子様

関口常正様、中村裕一様、政井宗夫様

田崎吾郎様、松村敏弘様、飯田みさ様

深く御礼申し上げます。

二 本誌今号は記念号

本誌は、平成九（一九九七）年四月に創刊し、本年二月に発行した九十号で、十五年を過ごすことになりました。隔月の発行は、執筆者にとってもなかなかの苦勞ではありますが、それを支えて下さる歴代の編集者、印刷・製本・発送を担って下さる会員の皆様のお力なしには成り立たないものです。また視覚障害者向けに音訳の勞を執って下さっている音訳グループ「やまびこ」の皆様には、計り知れないご苦勞をおかけしているものと存じます。

この十五年は、確かに通過点に過ぎないかもしれませんが、しかしこれだけ続けて来られたことは、それだけでも意義のあるものと捉えてよいはずですよ。

今回は記念として、横浜・東京の会員と、漢点字と一緒に勉強して下さい。貴重なご意見をいただいております。音訳に当たって、貴重なご意見をいただいております。埼玉県・嵐山町の吉田より子様より、原稿を頂戴致しました。大変ありがとうございました。

なお何時もお名前を掲載致しませんが、「漢文のページ」を担当して下さい。おられますのは、東京の会員の安藤純子さん、齋藤寿美子さん、そして横浜の会員の吉田信子さんです。心より御礼申し上げます。本誌はまだ続けて参ります。皆様の変わりにせぬご支援を、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

三 会員募集講座

東京漢点字羽化の会では、この五月九日（水）を初回とする、会員募集講座を開催致します。要項は以下の通りです。

東京漢点字羽化の会 会員募集講座

本会では、以下の要領で会員募集の講座を開催致します。皆様のご応募を、心よりお待ちしております。

主催・東京漢点字羽化の会

目的…漢点字の書物を作る活動にご参加下さる方を募っております。漢点字訳の方法は、パソコンを使って一般の文書を作成し、そのファイルを専用プログラムによって漢点字文書に変換します。

日程：2012(平成24)年 5/9、5/23、6/6(水)、13:30～15:30
受付：5/9、13:00～。会場：港区立障害保健福祉センター、7 F ヒューマンプラザ第1会議室 (JR浜松町駅または都営地下鉄浅草線・大江戸線・大門駅、徒歩10分) 〒105-0014 港区芝1-8-23 Tel.03-5439-2511、FAX03-5439-2514
受講料：1000円(資料代)
申し込み：往復葉書で、住所、氏名(振り仮名)、電話番号、Eメール・アドレスを記入し、担当・菅野良之(〒108-0073 港区三田2-17-45)宛にお送り下さい。締め切り：2012年4月30日必着(問い合わせ：岡田 健嗣・Tel.03-3614-9750)

四 漢点字学習会

横浜では、今年度も学習者を募集しております。視覚障害者で、漢字の世界へ一歩を進めたいとお考えの皆様、お近くにそのような方がおられる皆様、お気軽にご参加下さい。

会員一同お待ちしております。

今年度最初の学習会は、五月五日(土)、一四〇〇から、ボランティアセンター八階・ボランティアコーナー(横浜市健康福祉総合センター内、JR桜木町駅下車)で行います。

東京でも同様に、学習会を行っております。

詳細は、岡田(03・3614・9750)までお尋ね下さい。

漢文のページ

白居易「觀刈麥」より

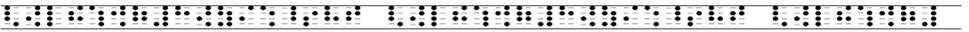
(五月の暑い日、たわわに実る麦を刈る人々の忙しく立ち働く様子を記した後に続く段)

復 抱 右 左 聽 聞 家 拾 今 曾 吏 歲 念 尽
 有 子 手 臂 其 者 田 此 我 不 祿 晏 此 日
 貧 在 乘 懸 相 為 輸 充 何 事 三 有 私 不
 婦 其 遺 弊 顧 悲 稅 飢 功 農 百 余 自 能
 人 傍 穗 筐 言 傷 盡 腸 德 桑 石 糧 媿 忘
ル ニ リ ニ レ ク ニ ハ レ レ ト ニ ル ニ カ レ ハ ル

復 貧しき婦人有り
 子を抱きて其の傍らに在り
 右手に遺れる穂を乗り
 左臂に弊れし筐を懸く
 其の相顧みて言うを聴けば
 聞く者 為に悲傷す
 家田は税を輸して尽き
 此を拾いて飢腸を充たすと
 今我れ何の功德ありて
 曾て農桑を事とせず
 吏祿 三百石
 歳晏にも余糧有るや
 此を念いて私かに自ら媿じ
 尽日 忘るる能わず



農桑 || 農耕と
 歳晏 || 年末 養蚕



復 有 リ 貧 シキ 婦 人

抱 キテ 子 ヲ 在 リ 其 ノ 傍 ラ

ニ

右 手 ニ 乗 リ 遺 レル 穂 ヲ

左 臂 ニ 懸 ク 弊 レシ 筐 ヲ

聴 ケ バ 其 ノ 相 顧 ミテ 言 フヲ

聞 ク 者 為 ニ 悲 傷 ス

家 田 ハ 輸 シテ 税 ヲ 尽 キ

拾 ヒテ 此 ヲ 充 タスト 飢 腸

ヲ

今 我 レ 何 ノ 功 徳 アリテ

會 テ 不 事 トセ 農 桑 ヲ

吏 禄 二 百 石

歳 晏 ニモ 有 ルヤ 余 糧

念 ヒテ 此 ヲ 私 カニ 自 ラ ズ

尽 日 不 能 ハ 忘 ルル

～ 女 偏 + 鬼 は じ る き



白居易

参照図書：奥平 卓（おくだいら たかし）
『漢文の読みかた』（岩波ジュニア新書）



「𠄎 (良𠄎𠄎)」で表されます。

「限界」「限定」「限度」「制限」「期限」「有限会社」「力の限り」

(28) 退𠄎𠄎 タイ しりぞ-く しりぞ-ける ひ-く
の-く

「良𠄎𠄎」に「しんにょう」を加えた形の文字です。足が進まなくなる、足が止まるという意味を表します。公の立場や職を退く、その場所を離れる、社会の気風が衰える、後ろ向きな気分が立ち込めるという意味に用いられます。漢点字では、「𠄎 (しんにょう)」と「𠄎 (良𠄎𠄎)」で表されます。

「退任」「退職」「退学」「退院」「退廢的」「引退」「退け時」「退
っ引きならない」

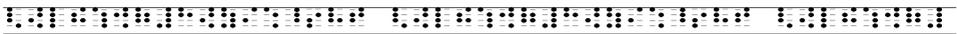
(29) 既𠄎𠄎 キ すで-に

「良𠄎𠄎」とその右側に、腹一杯食べる、食べ尽くすという意味を表す部首が置かれた形の文字です。「すでに」と読んで、…は行われた、…をしてしまった、こうなった上には…、という意味に用いられます。「キ」の音は、「既婚者と未婚者」、「既知数と未知数」のように、「未𠄎𠄎」の対語として用いられます。漢点字では、「𠄎 (良𠄎𠄎)」と「𠄎」で表されます。

* この文字の旁は、「食べ尽くす」という意味の部首です。単独に用いられることは、ほとんどありません。この部首は、これまでに出ていませんが、「既𠄎𠄎」は、多く他の文字の部首となりますので、ここにご紹介しました。

「既婚者と未婚者」「既知数と未知数」「既着と未着」「既製服」「デ
ジャビュとは既視感のことです。」





漢点字講習用テキスト

初級編 第三十一回

5 複合文字 (2)

2. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (2)

前節に続けて、〈第一基本文字〉と〈比較文字〉が部首として構成される文字をご紹介します。

※「良」を部首として含む文字四つと、「良」を部首として含む文字六つ。

*この二文字は墨字では、形の上で、天辺に点があるかないかの違いしかありませんが、音と意味には大きな相違があります。前者は「良」の字義、すなわち善良で豊かでゆったりとしたという意味を、後者は、目に隈取りをするとか、がっちりとはまり込むという意味を表します。漢点字では何れも「」で表されます。

(26) 根 コン ね

「木」の右側に「良」を置いた形の文字です。木の根が地中深く食い入って、がっしりと構えている様子を表しています。「コン」と読んで、精神力や気力の強さを表し、「ね」と読んで、最も下のところ、ものごとの根本、ものごとの生じるところ、本来の性質などを表します。数学では、英語のルートの訳語で、平方根・立方根と用いられます。漢点字では、「(木)」と「(良)」で表されます。

「根本」「根拠」「根元」「根幹」「根茎」「根性」「根気」「草根木皮」「大根」「球根」「平方根」「立方根」「根ほり葉ほり」「根も葉もない」「根を詰める」

(27) 限 ゲン かぎ-る かぎ-り

「こざと偏」の右側に「良」を置いた形の文字です。土を盛って、ここが境界だと宣言することを表しています。「かぎる、かぎり」は、地域やものごとの境界を定める意味とともに、そこにあるもの全部、あるだけ出し切るという意味も表します。漢点字では、「(こざと偏)」と

編集後記

▼機関誌「うか」が創刊号を出したのは1967年4月のことですが、この「横浜漢点字羽化の会」の発足はその前の年でした。1966年1月に二俣川のライトセンターで漢点字ボランティア養成のための講習会が開かれました。それまでにパソコンを趣味とし、又仕事にも生かしてきた私にとって、点訳という仕事はまさにうつつけの対象でした。そこから私に「漢点字」のソフト開発という役割が与えられて、今に至ります▼昨今のIT世界の桁外れの進歩の速さには、ただただ驚くばかりですが、そういう技術の進歩に喜んでばかりはいられません。われわれの活動の受け手である視覚障害者にとって、めまぐるしく変化するIT環境に、関連する特殊なサービスの提供が追いついて行けないことです。端的にいえば、視覚障害者がパソコンを操作するのに不可欠な音声ソフトが、ウィンドウズの頻繁なバージョンアップに追いついて行けなくなってしまうということですが、ある程度プログラムの開発ができるといっても、音声ソフトの開発までは手が届きません。困ったことだと、歯がゆい思いをかみしめています。

木下 和久

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は6月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。